

タイトル	発達が「気になる」子どもの理解 - 幼児期から思春期までの「発達の連続性」の観点から -
著者	進藤, 将敏; SHINDO, Masatoshi
引用	開発論集(115): 1-10
発行日	2025-03-05

# 発達が「気になる」子どもの理解

—— 幼児期から思春期までの「発達の連続性」の観点から ——

進 藤 将 敏\*

キーワード：発達, 「気になる」子ども, 幼児期, 児童期, 思春期, 発達の連続性

## 1. はじめに

近年では「知的な発達に遅れは認められないが、行動や感情のコントロールが難しい、または他者とうまくコミュニケーションが取れない」といった特徴をもつ、発達が「気になる」子どもの教育が課題となっている。本稿では、発達が「気になる」子どもを理解する目的から、「気になる」特徴とその要因について解説する。そして、発達を支援するうえで必要な考え方として、幼児期から思春期までの「発達の連続性」（幼児期から見られる「気になる」特徴が思春期までつながっていること）を捉えることの重要性を示す。

## 2. 幼児期における発達が「気になる」子ども

### 1) 「気になる」行動の特徴

保育所や幼稚園の現場では、発達が「気になる」子どもに対する理解が難しい、または教育・保育の仕方が難しいといった問題が全国的に増えている。この問題を解決するために、まずは「気になる」子どもとは、どのような行動の特徴をもつのかについて知る必要があるだろう。

発達が「気になる」子どもの特徴を見てみると、知的発達には目立った遅れはないものの、①対人トラブルが多い、②落ち着きがない、③順応性が低い、④ルール違反が多い、⑤衝動性が高い、といった点が報告されている（図1）。

特に、順応性の低さ（③）について、「気になる」子どもは場面や状況によって行動や姿が変わりやすいことがある。たとえば、自分が好きな活動や普段よりも緊張感のある場面（例えば授業参観、保育参観）では集中力を発揮して取り組めるが、苦手な活動場面になると動きが多くなり、落ち着きのなさ（②）が目立つ、または集団から逸脱してルール違反（④）をすることもある。また、家庭での行動・姿と集団での行動・姿が異なることも多く、家庭では一人で遊ぶため遊びに集中できるが、保育所や幼稚園などの集団場面では他の子どもに衝動的にちょっ

---

\*（しんどう まさとし）北海学園大学開発研究所研究員，北海学園大学経営学部准教授

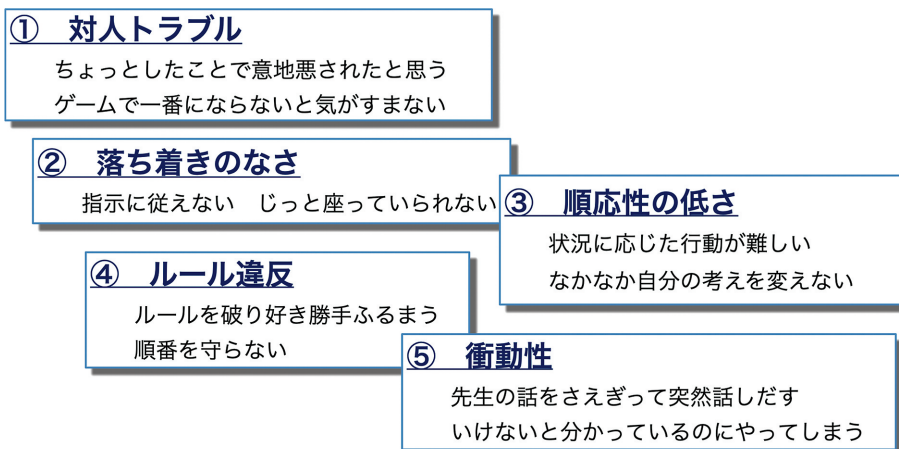


図1 幼児期における「気になる」行動の特徴（本郷，2006 をもとに作成）

かいを出し (⑤)，その結果，対人トラブル (①) が生じやすくなることもある。

このことから，上記①～⑤の「気になる」行動の特徴はそれぞれが独立しているのではなく，相互に関連していると考えられる。また，それぞれの特徴の表れ方は，年齢によって異なるといった報告もなされている (図2)。

図2は，保育者が「気になる」子どもの個々の行動についてどの程度「気になる」のかを評価したものであり，評定値が高いほど「気になる」と解釈できる。図の上段にある「落ち着きのなさ」と「順応性の低さ」は低年齢児から比較的高い評定値であることが特徴的である。一方，下段にある「対人トラブル」と「ルール違反」は年齢に伴い増加する傾向が見て取れる。特に「対人トラブル」については，他児が発達することによる環境の変化が関係すると考えられている (本郷ほか，2003)。例えば，「気になる」子ども以外の子どもたちの言葉の発達が進むと，「気になる」子どもに対して周囲から不満が出やすくなったり，担任の先生に言いつける子どもが増えることが関係している。また，「ルール違反」が6歳で増加する背景も同様に，環境の変化が推測される。すなわち，保育所や幼稚園では就学に向けた準備として集団生活でのルールを増やしたり，ルールのある遊びを導入することが多くなるためと考えられる。

以上のように「気になる」子どもの行動の主な特徴について概観したが，「気になる」子どもを理解するためには「気になる」行動を作り出している要因についても考慮しなくてはならない。そこで，以降では「気になる」行動の要因について見ていく。

## 2) 「気になる」行動の要因

「気になる」行動として「落ち着きのなさ」を例にあげた場合，その要因としては，a) 認知の遅れ・偏り，b) 行動調整の難しさ，c) 物や事態の要求，d) 注目欲求，e) 自己防衛などが考えられる (表1)。

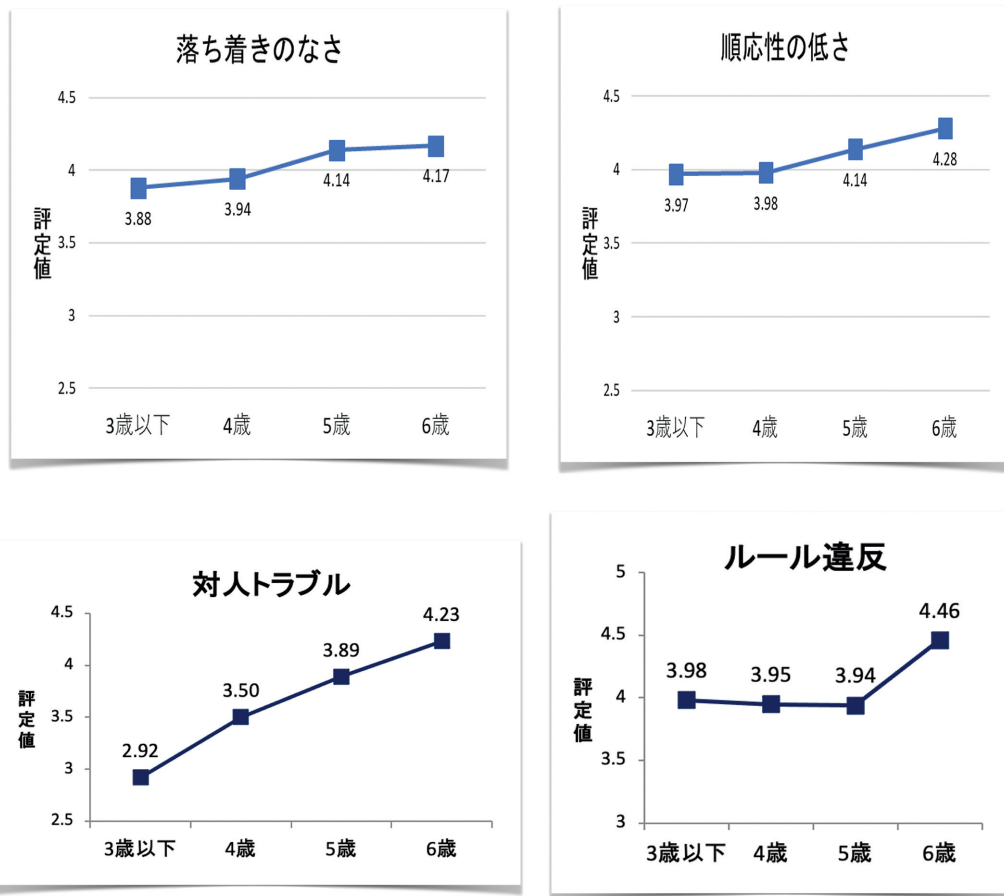


図2 幼児期における「気になる」行動と年齢の関係（本郷ほか，2003をもとに作成）

表1 「落ち着きのなさ」の要因と特徴の例（本郷，2010をもとに作成）

要因	特徴
a) 認知の遅れ・偏り	言葉の意味が十分に理解できないため指示が通らない。また、記憶できる範囲が狭い場合は、指示された最後の言葉しか覚えておらず、指示を理解していないような印象を与え、「落ち着きがない」と見られてしまう。
b) 行動調整の難しさ	自分の身体の動きに注意して慎重に動くことが難しい。また、感情のコントロールが苦手なため、気持ちを立て直すことが難しい。
c) 物や事態の要求	遊びの中で自分が一番にならないと気が済まなかったり、おもちゃなどの物を他の子どもと共有できず独り占めしてしまう。
d) 注目欲求	集団場面で周囲からの注目を浴びたくて突然大声を発したり、動き回ったりする。また、タイミングよく注意されてもかえって注目欲求が満たされるため、行動がエスカレートすることもある。
e) 自己防衛	自分が勝てそうにないゲームには参加しない。また、弱い部分を隠すため「多動・多弁」になる。ゲームに勝った他児をたたくこともある。

そして、a)～e)の要因は互いに関連することで複数の「気になる」行動となって表れることもある。たとえば、c)物や事態の要求として、一番にならないと気が済まないために「ルール違反」をしてしまい、b)行動調整が難しいがゆえに感情のコントロールが効かず、「対人トラブル」に発展するなどがあり得る。

したがって、「気になる」子どもの行動を理解するためには、ひとつひとつの行動の要因は何なのかを紐解いていく必要があり、それぞれの要因が互いに関連して「気になる」特徴となっていることを念頭に置かななくてはならない。さらにそのような複雑さに加え、目の前の子どもが「気になる」かどうかの程度も、子どもを観察する場面や人によって受け止め方が異なることが多い。このことも「気になる」子どもの理解を難しくしている。

### 3) 「気になる」子どもの姿の実際

「気になる」子どもが実際の生活の中でどのような問題を抱えているのかについて、図3には乳幼児発達スケール KIDS（子どもの普段の行動から発達を捉える検査）による分析結果として、「気になる」子どもの発達において特に課題がある項目を示した。

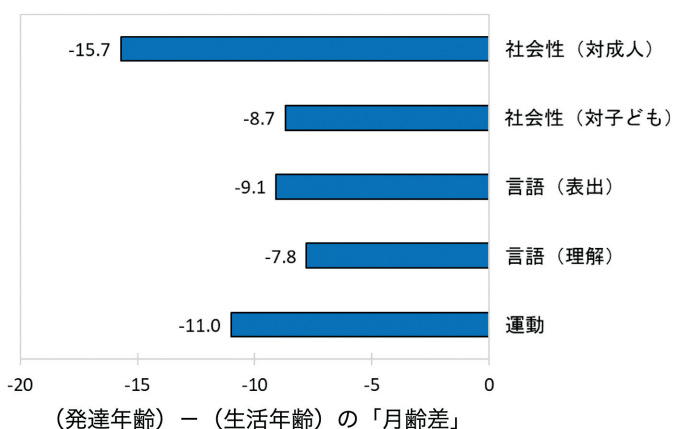


図3 幼児期の「気になる」子どもにおいて特に発達に課題がある項目（本郷, 2015をもとに作成）

図3の横軸の「月齢差」は、発達年齢（発達の程度を示す指標）から生活年齢（実際の年齢）を引いた値であり、マイナスの値が大きいほど発達の遅れの程度が大きいことを表している。「気になる」子どもの特徴として、最も遅れが目立つ項目は「社会性（対成人）」である（例：大人に対して暴言を吐く）。このことから、「気になる」子どもは他児との不適切な関わりよりもむしろ、大人に対する不適切な関わりの方が目立つことがわかる。

また、「運動」についても遅れが顕著である。運動発達については「社会性の発達」との関連が想定されている（Hongo et al., 2015）。たとえば、運動が苦手な子どもは仲間との遊びの輪に入りにくくなり、集団生活をうまく過ごせなくなる可能性が高くなると考えられる。

このような、運動と社会性の関連を考えさせるデータとして、表2には「気になる」子どもにおける運動発達の特徴を示した。通過率が低い項目（「気になる」子どもにとって難しいこと）と高い項目（「気になる」子どもにとって容易なこと）の違いを検討してみると、通過率が低い項目には、他者との関係が関わる項目（例：子ども達だけでリレー遊びができる）や、モノの動きにあわせて自分の動きを調整することが必要な項目（例：ボールを3回くらいドリブルできる）など、自己と他者（あるいはモノ）との関係の調整が求められる内容が含まれている。一方、通過率の高い項目には自己の動きだけで済んでしまう内容が多い。

以上から、「気になる」子どもの理解を深め、支援につなげていくためには、運動発達の様相を捉える視点も不可欠である。

表2 「気になる」子どもにおける運動発達の特徴（本郷，2015をもとに作成）

分類	項目	標準 通過月齢	通過率
通過率が 低い項目	子ども達だけでリレー遊びができる	5:0	<b>35.7</b>
	スキップができる	4:3	<b>48.9</b>
	ボールを3回くらいドリブルできる	5:3	<b>56.0</b>
	ブランコに立ち乗りができる	3:9	<b>57.4</b>
通過率が 高い項目	あお向けですべり台をすべれる	3:3	<b>100.0</b>
	転がっているボールをつかまえることができる	3:3	<b>100.0</b>
	片足ケンケンができる	3:3	<b>100.0</b>
	20mくらい全力疾走できる	3:6	<b>100.0</b>
	でんぐり返りができる	3:0	<b>97.9</b>
	ジャングルジムの頂上まで登れる	3:6	<b>95.8</b>

### 3. 児童期における「気になる」子ども

「気になる」子どもは幼児期だけの問題ではない。児童期以降でも教育の難しさが課題となっている（本郷ほか，2009）。先述のとおり、「気になる」子どもは場面や状況によって示す行動が異なることが多いこともあり理解が難しい。このことから、教師から見て教育が困難と感じる子どもの原因は分かりにくいいため、親子関係の問題や心理的な問題だけが注目されやすいのかもしれない。しかし、子どもの現在の姿を過去に遡って考えてみると、実際は乳幼児期からの支援が不十分であったがゆえ、発達の問題を抱えたままになっており、その時期に見合った発達水準に到達していないことがよくある。

そこで、以下では児童期の「気になる」子どもにおける感情面の発達の特徴を見ていく。King & Kirschenbaum（1996）によると、幼児期から児童期にかけては「感情」の発達が重要な発達目標として提唱されている（表3）。児童期という発達段階を考えた場合、感情面の発



達に着目することには大きな意義がある。理由として、就学以降は学業面のみならず、対人関係（特に友人関係）も複雑化するため、「気になる」子どもにとっては社会適応がますます難しくなることが予想されるからである。

表3 感情の発達目標とその達成に必要な要素（King & Kirschenbaum, 1996 をもとに作成）

発達目標	必要な要素
①自己理解を深めること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好き嫌いの言語表現を増やすこと。</li> <li>・感情を述べる力を高めること。</li> <li>・自分の欲求の表現を増やすこと。</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>
②ポジティブな自己イメージを高めること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分を肯定的に述べる頻度を増やすこと。</li> <li>・失敗しても気分を立て直せる頻度を増やすこと。</li> <li>・自己表現の頻度を増やすこと。</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>
③他者理解を深めること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者と自分が似ている点、違う点を述べる力を高めること。</li> <li>・援助、共有、協調行動の頻度を増やすこと。</li> <li>・相手の話を遮らずに聞く時間を長くすること。</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>

表4には、社会適応に不可欠となる対人関係の関連として、「気になる」子どもにおける感情の発達の実態を示した。

表4 児童期における感情発達の特徴（本郷ほか, 2018 をもとに作成）

領域	項目	「気になる」 児童 (A)	典型発達児 (B)	差 (A-B)
<b>抑制</b>	嬉しい気持ちを抑える	2.27	2.46	-0.19
	怒っている気持ちを抑える	2.31	2.94	-0.63
	悲しい気持ちを抑える	2.45	2.90	-0.45
<b>理解</b>	友達の嬉しい気持ちがわかる	3.46	4.12	-0.66
	友達の怒っている気持ちがわかる	3.24	4.05	-0.81
	友達の悲しい気持ちがわかる	3.19	4.01	-0.82
<b>共感</b>	友達の嬉しい気持ちを自分のことのように感じる	2.85	3.74	-0.89
	友達の怒っている気持ちを自分のことのように感じる	2.65	3.53	-0.88
	友達の悲しい気持ちを自分のことのように感じる	2.63	3.55	-0.92

これを見ると「気になる」児童は、とりわけ（友達の気持ちの）「理解」や「共感」の領域において典型発達児との評価点の差が大きくなっており、典型発達児に比べて対人関係の難しさを抱えやすいことが推察される。

関連して、図4には「気になる」児童の社会適応に関する指標として、学級生活満足感に関するデータが示されている。

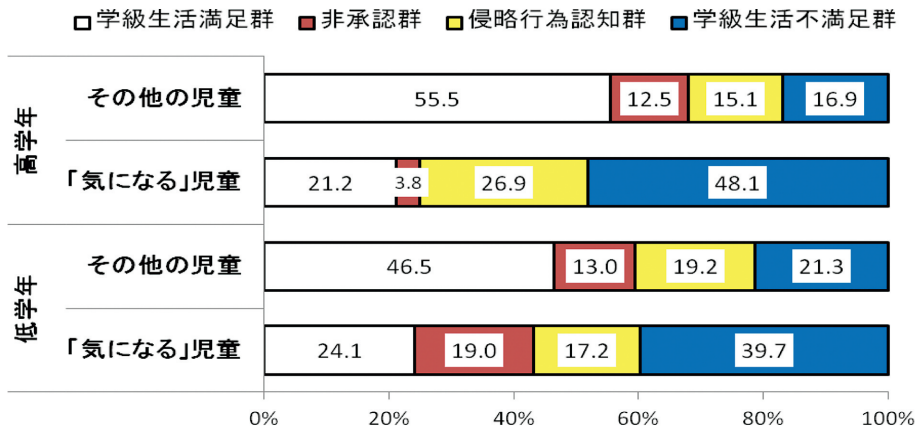


図4 児童期における学級生活満足度（相澤・本郷，2011をもとに作成）

学級生活満足度は、子ども本人が学級生活について自己評価したものであり、「学級生活満足群（または不満足群）」は学級生活に満足（または不満足）であると認識している児童の割合が表れている。また、「非承認群」は「自分は周りから受け入れられていない」といった認識、「侵略行為認知群」は「自分はいじめや悪ふざけを受けている」といった認識を表している。図4より、「気になる」児童はその他の児童に比べて高学年・低学年ともに学級生活満足群が2割程度と少ない。このことから、「気になる」児童の多くは不適応感を抱えながら学校生活を送っていることがわかる。

参考までに、最近では小学生（児童期）の不登校が急激に増加している（図5）。不登校の

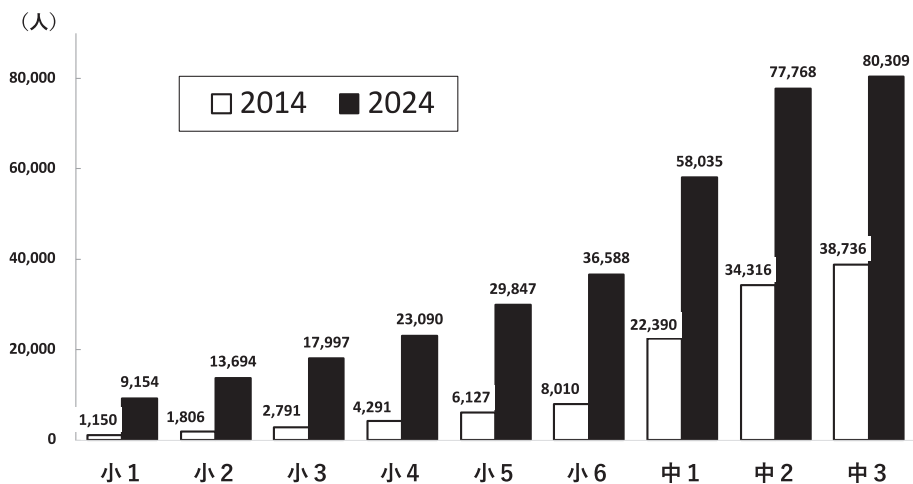


図5 近年における不登校児童生徒数の変化（文部科学省，2014，2024をもとに作成）



問題は従来、主に思春期以降の問題として取り扱われることが多かったが、現在ではより低年齢からの問題として認識し直す必要に迫られている。不登校の原因としては「無気力」、「情緒の問題」、「友人関係の問題」、「学業不振」など（文部科学省，2024）、さまざまなものが考えられるが、これまで紹介した「気になる」子どもが抱える問題も無関係ではないだろう。

#### 4. 思春期における「気になる」子どもの特徴

「気になる」子どもの中には、のちに自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、限局性学習症などの診断を受ける子どもがいる一方で、思春期以降も発達障害として診断されずに必要な支援を受けないまま中学、高校に進学する子どももいる。幼児期では特徴が目立たなかったが、思春期になって対人関係の問題が顕著になる場合があるため、思春期以降は「気になる」特徴が消失するとは限らず、幼児期からの問題が残されているケースがある。したがって、「気になる」子どもの発達は、幼児期から思春期まで続いているという「発達の連続性」を見通すことが「気になる」子どもの理解には不可欠なのである。

表5には、高校生における「気になる」特徴が男女別に示されている。これをみると、幼児期における「気になる」行動の特徴と共通する内容が多いことから、幼児期の「気になる」特徴が思春期にも引き続き残されていると推測できる。

表5 「気になる」男子・女子高校生の特徴（本郷ほか，2009をもとに作成）

男子	女子
<ul style="list-style-type: none"> <li>・体の動きがぎこちない。</li> <li>・具体的に指示しないと理解が難しい。</li> <li>・友だちにちょっかいを出す。</li> <li>・友だちの活動を妨害したりする。</li> <li>・手足をそわそわ動かしたり、きよろきよろする。</li> <li>・変わった声や話し方をする。</li> <li>・課題や活動を順序立てて行うことが難しい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日によって調子の良い時と悪い時の波が大きい。</li> <li>・ちょっとしたことでもいじわるされたと思う。</li> <li>・友だちがしている行為に対して怒る。</li> <li>・一度怒るとなかなかおさまらない。</li> </ul>

また、幼児期から児童期にかけて「気になる」子どもは男児に多く見られていたが、中学以降になると「気になる」女子生徒の割合が増加することが報告されている（相澤・本郷，2009；本郷ほか，2009）。図6は、保育所から高校までの「気になる」子どもの男女比の変化である。

加えて、発達障害の診断名が「ない」生徒の方が、診断名が「ある」生徒よりも「気になる」特徴が目立つことも報告されている（本郷，2015）。診断名が「ある」生徒の場合は早期から支援や配慮を受けてきたのに対し、診断名が「ない」生徒はこれまで支援を受けずに現在に至り、「気になる」特徴が目立ってきたと考えられる。また、幼児期から児童期において

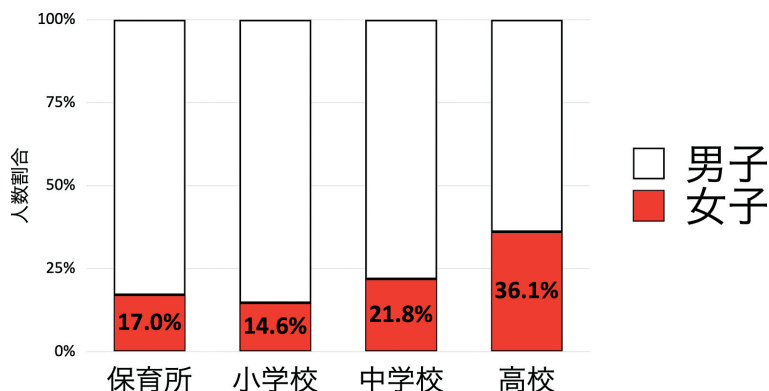


図6 「気になる」子どもの男女比の変化（本郷，2015 をもとに作成）

「気になる」女子は男子に比べて行動が目立ちにくく大人しいため、これまで抱えていた問題に気づかれなかった可能性もあるだろう。

## 5. 幼児期から思春期までの「発達の連続性」を考えることの重要性

目の前の子どもを理解するためには、発達障害であるかどうかと言うよりも、子どもの行動に影響を与えるさまざまな要因を考慮し、時間の経過に伴う変化を見据えた理解と支援を考えなければならない。発達早期からの支援が社会適応を促す決定的な要素であるとは言いきれないが、これまで示した幼児期から思春期までのつながり（発達の連続性）を考えてみると、子どもの将来を見通したかかわりや理解の仕方が重要である。

## 6. おわりに

本稿では、発達が「気になる」子どもを支援するうえで不可欠となる、幼児期から思春期までの「気になる」子どもの特徴の理解と、「気になる」特徴のつながり（発達の連続性）を捉えるための知見を紹介した。

今後の課題は、「気になる」子どもを理解したうえで、子どもが社会生活にうまく適応できるような効果的な支援の考案と実践を積み重ねていくことである。本郷（2010）によると、「気になる」子どもの支援で重要なことは、「気になる」子ども本人への働きかけのみならず、「気になる」子どもを取り巻く環境への働きかけも考慮することである。この観点から、「気になる」子どもの発達を支援する5つの柱が提案されている。すなわち、①「気になる」子ども本人への支援、②クラス集団への支援、③物的環境の調整、④教育・保育体制の整備、⑤保護者への支援である（本郷，2010を参考）。①～⑤に沿った支援を同時的かつ継続的に実施することが肝要であり、その実践によって「気になる」子どもの適応的な発達を促すことを目指

す必要がある。

また、発達早期からの継続した支援を進めていくためには、保育所や幼稚園での保育実践的な研究だけでなく、小学校から高校の現場における教育実践的な研究にもとづく知見も接続させなくてはならない。支援がうまくいったケースだけでなく支援が困難なケースも含め、発達支援に関する実践的な知見の蓄積がより一層求められている。

なお、本論は北海学園大学開発研究所の総合研究「北海道の地域構造と社会課題・地域政策に関する総合的研究」（2024年～2026年）における豊富町プロジェクトに関連してまとめた。

## 引用文献

- 相澤雅文・本郷一夫（2009）. 学級担任が「気になる」児童生徒についての調査研究（1）：京都府の小学校学級担任への調査から 京都教育大学紀要, 115, 131-144.
- 相澤雅文・本郷一夫（2011）. 「気になる」児童の学級集団適応に関する研究—「気になる」児童のチェックリストと hyper-QU を通して LD 研究, 20, 352-364.
- 本郷一夫（2006）. 保育の場における「気になる」子どもの理解と対応—特別支援教育への接続—おうふう
- 本郷一夫（2010）. 「気になる」子どもの保育と保護者支援 建帛者
- 本郷一夫（2015）. 発達心理学と保育実践政策学との循環性を通じた双方向的発展 日本発達心理学会第26回大会シンポジウム
- 本郷一夫・相澤雅文・飯島典子・半澤万里・中村佳世（2009）. 高校における「気になる」生徒の理解と支援に関する研究 東北大学大学院教育学研究科教育ネットワーク研究センター年報, 9, 1-10.
- 本郷一夫・平川久美子・飯島典子・高橋千枝・相澤雅文（2018）. 児童期の情動発達とその特異性に関する研究6：「気になる」児童の情動発達における項目別特徴 日本発達心理学会第29回大会発表論文集
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子（2003）. 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査研究 発達障害研究, 25, 50-61.
- Hongo, K., Shindo, M., Obuchi, M., & Matsumoto, E. (2015). The Relation of Motor Development and Self-Efficacy in Young Children. *Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University*. Vol. 1, 19-26.
- King, C. A., & Kirschenbaum, D. S. (著) 佐藤正二・前田健一・佐藤容子・相川充（訳）（1996）. 子ども援助の社会的スキル 幼児・低学年児童の対人行動訓練 川島書店
- 文部科学省（2014）. 平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
- 文部科学省（2024）. 令和5年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」